

天声人語

主人公の安西ところは中学1年の女子。入学まもない4月、怖くて学校に行けなくなる。同級生から一方的に敵視されて嫌がらせを受け、心に傷を負ったからだ――。辻村深月さんの長

編『かがみの孤城』が本屋大賞に選ばれた▼昨春の刊行以来、不登校の問題に取り組む人々に広く支持されてきた。「不登校の渦中にある生徒の思いは言葉ににくい。その心境を丁寧にすくい取った小説だと思う」。20年ほど前から不登校の若者と向き合ってきた「不登校新聞」編集長の石井志昂さん(36)は話す▼石井さん自身、中学時代に不登校を経験している。同級生の冷たい視線、高圧的な教師、両親の期待。それらが一挙に押し寄せた。代わりに通ったフリースクールで不登校新聞の創刊に携わった▼文科省によると、不登校の中学生はこの数年、増え続けている。「いま学校側は生徒を枠からはみ出させないよう必死。生徒も疲れ切っている」と石井さんは見る▼小説で主人公の救いとなったのは、自室の鏡の奥にある異世界の「城」だった。辻村さんも不登校新聞の取材に「私の人生で一番つらかったのは中学時代」と語っている。本の世界に居場所を見いだし、何とか通い続けたそうだ▼作品を読み終えて思い出したのは、中学特有のあのヒリヒリした感覚である。教師や友人の心ないひと言に人格を全否定されたように感じ、孤独の淵に沈んだ。中学生たちが心穏やかに過ごせる多様な「城」をこの社会は提供できているのだろうか。